

カシラブン 頭分 組頭以下、物頭・番頭等

の諸頭役、及び職掌によつてその班列頭役に準ずる町奉行・御臺所奉行・御細工奉行等をすべて頭分以上といひ、御郡奉行・遠所町奉行・御普請奉行・割場奉行等所謂平士役懸なるものを頭分以下といふた。

カシンイン 花心院 加賀藩主第五代前田綱紀の子雅十郎の法號。詳しくは花心院春窓元夢童子。

カスガキチザエモン 春日吉左衛門 前田利長に仕へて三百石を領し、慶長九年歿。子孫相繼いで藩に仕へた。

カスガシヤ 春日社 石川郡八幡に鎮座する。白山記には八幡宮の次に『春日社、寶殿拜殿』と載せられる。元祿十四年の郷村名義抄に、石川郡八幡村は往昔春日村といふたが、八幡大神を勧請してから名を改めたといふ傳説を記してゐる。然れば春日社は、此の地の産土神であつたのであらう。社殿は今絶滅に歸してゐるが、春日の森と稱する一六五平方米許の地を遺してゐる。

カスガシヤ 春日社 河北郡山上に鎮座する。祭る所春日四座。社記に養老元年鎮座、小坂庄の惣社であるとする。蓋し小坂庄には奈良の春日社領があつたから、その神を勧請したのであらう。この社領のことは、康正二年造内裏段錢并國役引の中に載せられてゐる。

カスガシヤ 春日社 珠洲郡飯田に在つて、其の初は明らかでない。貞享二年の書上並びに文政社號帳に春日大明神とある。

カスガシヤ 春日社 珠洲郡馬繰に在つて、永正十年平十郎左衛門恒俊が初めて造營したといふ。

カスガノ 春日野 珠洲郡直郷に屬する下島越・堂・谷・法住寺は、家屋耕地共に混淆の地であつたから、明治八年十月許可を得て春日野と稱した。

カスガマチ 春日町 金澤の町名。附近河北郡山上村の地内に春日の社があるに依つて町名に呼んだものである。

カスガミ 糟神 大永七年の託宣記に、『白山九所小神、第二糟神、勝軍地蔵。』とするが、今廢絶して明らかでない。但し白山記には九所小神中に弓原社を數へて、その註に『糟神白山在之、異説入之。』となつてゐる。之によれば白山本宮境内に在つたのであらう。糟神の神名も因つて起る所を知らぬ。同郡横江又は笠舞の糟宮の類かとも思はれる。

カスカミガハ 澤上川 源を能美郡火燈山の西に發し、西流して下麥口に至り、西北に轉じ、左右兩岸より細流を入れ、桂谷・岩淵を經、中に於いて梯川に合する。流程七軒五。

カスカミジンジャ 澤上神社 能美郡中(部落名)に鎮座する。式内等舊社記に、『澤上神社。式内一座。輕海郷中村鎮座。或云祭神天帶彦國押人命。蓋有異説。』と見え、能美郡名蹟志にも、この中の神社を式内のそれとし、今は社家社僧もなく、その名のみであると記する。しかし承應二年河崎秀俊の書入本には、鍋谷に在るものを式の澤上神社に當ててゐる。

カスガヤマ 春日山 河北郡山上に屬する金澤郊外の卯辰山に連續する山尾である。麓に春日社あるを以て名づける。

カスガヤマ 春日山 珠洲郡飯田の西方に在つて、春日神社の鎮座する所である。丘上から海を望み得て佳景である。

カスガヤマジョウ 春日山城 河北郡山上小坂神社の傍なる小丘を、里俗相傳へて上田伯耆の城跡であるといつてゐる。しかし上田伯耆は文獻に所見がない。

カスガヤマヤキ 春日山燒 金澤郊外なる河北郡山上の春日山麓に窯を開いて焼いた陶器。京都の工人青木木米が、金澤の町年寄龜田純藏の囑によつて、文化四年十一月から創めたもので、藩費の補助を得、宮竹屋喜左衛門(商齋)・松田平四郎(馬宋)二人が肝煎になつた。然るに新營の工場に於ける木米の製作は甚だしく成功せずして、翌五年冬歸洛するに至つたが、その後製陶は尙衰勢ながら繼續し、本多貞吉・越中屋兵吉・任田屋徳右衛門等が之に従事した。この陶窯は文化十一年乃至文政四年の間に廢滅したと信すべき理由がある。

カスセ 數瀬 能美郡輕海郷に屬する部落。カスノミヤ 糟宮 石川郡横江の入口なる神社の傍に石地蔵がある。小倉等の平癒を祈り、その癒えたる後は酒の糟を備へて報賽とする。因りて糟の宮と稱する。

カスノミヤ 糟宮 石川郡笠舞の上笠舞に在る。社殿には日吉宮と顔するが、里人は糟宮と稱へる。聖の治癒を祈つて、効ある時は酒糟を供へるからである。

カスヘバシ 主計橋 金澤百姓町慶慶寺の横より主馬町に入る所、玄蕃川に架けられた橋であるが、名稱の起因は不明である。

カスヘバシ 主計橋 金澤橋梁記に『かずへ橋、淺野川大橋下也』とある。此の橋は、

内惣構堀の下流が主計町から淺野川に注ぐ所に架したものをいふ。

カズヘマチ 主計町 金澤淺野川の左岸大橋脇より一文橋(今の中橋)に至る邊までをいふ。越登賀三州志來因概覽附録註に、淺野川端を主計町と呼ぶは、富田主計の居邸の附近であつた故であると記してゐる。

カスミガイケ 霞ヶ池 金澤兼六園内千歳臺に續いた所につくられた池で、その中央にある小島を龜中山とも蓬萊山とも言つてゐる。この池は前田齊泰の時に濼たれたものである。西岸から池水へ架け出された小亭は内橋亭といつて、藩政時代からの建物ではあるが、園内の他の所にあつたのを明治以後に移したものである。その背面の小山は蟹螺山で、池を掘り上げた土で積み上げられたものであらう。

カスミガイケ 霞ヶ池 金澤長谷山慈光院のあつた地の北方なる麓で、本多氏の下邸内にあつた。昔は大池で、石浦岩の外羅郭であつたといふが、漸く埋もれて凹地の狀をなすのみになつて居た。霞池の名は霞野に在つたからであらう。

カスミガタ 霞がた 一冊。津幡の俳人見風著。京橋屋治兵衛板。北枝の文集は、芭蕉の講讀のあるものであつたが、元祿三年の火災に板面が焦げた。北枝はそれを蘇守等に磨かせて、鎮火形と名づけたことを芭蕉に報じたが、芭蕉はその唱への優美ならざるを喜ばず、霞形と改めしめた。この文集は北枝歿後李東の手に歸して居たが、見風の請によつて之を讀つた。その記念の爲見風がこの集を出したのである。千代尼素園の序や既白の跋が

カシ—カス